
第3次東御市総合計画

基本構想・前期基本計画 2024～2033
(基本構想たたき台)

令和5年6月

はじめに

黒字：第2次計画にもある項目

赤字：新規項目

1. 総合計画の概要

- (1) 計画策定の背景 ●
- (2) 計画の目的 ●
- (3) 計画の構成と期間 ●

2. 東御市の現状と課題

基本構想

1. 将来像

- (1) 将来像 ●
- (2) 人口目標 ●

2. 分野別ビジョン ●

3. 土地利用構想 ●

前期基本計画

1. 重点プロジェクトの考え方 ●

2. 施策体系 ●

3. 施策の展開 ●

4. 計画の進捗管理 ●

はじめに

1. 総合計画の概要

(1) 計画策定の背景

〈東御市の総合計画の沿革〉

・平成16（2004）年4月の合併により誕生した東御市は、以下の総合計画により総合的かつ計画的な市政運営を推進してきました。

名称	将来像	期間
第1次東御市総合計画	さわやかな風と出会いの 元気発信都市	平成16（2004） ～平成25（2013）年度
第2次東御市総合計画	人と自然が織りなす しあわせ交流都市 とうみ	平成26（2014） ～令和5（2023）年度

〈社会の変化〉

・近年、人口減少・少子化・高齢化がますます加速し、その現象に歯止めをかけるため、地方がそれぞれの地域特徴を生かし、持続可能な地域の構築を目指す「地方創生」への取組みが一層重要になったことに加え、社会全体でのデジタル変革（DX：デジタルトランスフォーメーション）の推進、脱炭素社会の実現、さらには子育て・子育てへの総合的な支援体制の構築など、これまでに経験したことのない様々な課題への対応に直面しており、市政に求められる役割は今後ますます多様化していくものと予想されます。

・また、新型コロナウイルス感染症拡大による経済活動の停滞から、景気動向の先行きの不透明さが増し、今まで以上に厳しい財政状況のもとで、市政運営を進めていくには、行政と市民がまちづくりに関する現況や課題を共有し、ともに知恵を出し合い、ともに問題解決を図ろうとすることが何よりも求められています。

〈第3次総合計画策定の趣旨〉

・このような状況の中、第2次総合計画の期間が終了します。目まぐるしく変転する予測困難な時代に対応し、持続可能なまちづくりを推進していくために、「第3次東御市総合計画（令和6（2024）から令和15（2033）年度）」（以下、本計画）を策定します。

(2) 計画の目的

- ・総合計画は、長期的なまちづくりの方針を、将来像やまちづくりの基本目標として定め、それを実現するための東御市の施策の方向性を示した市政運営の羅針盤です。
- ・計画書として策定することで、市民の皆さんや市職員が何度も参照しながら、同じゴールを見据えて、まちづくりを推進できるようにすることを目的としています。
- ・総合計画は本市の最上位計画です。分野別の個別計画は、総合計画と整合を取りながら策定・実施されます。

(3) 計画の構成と期間

・第3次総合計画の構成は、基本構想、基本計画及び実施計画の3層で構成します。計画期間は、基本構想を10年間、基本計画は前期・後期のそれぞれ5年間とします。

①基本構想

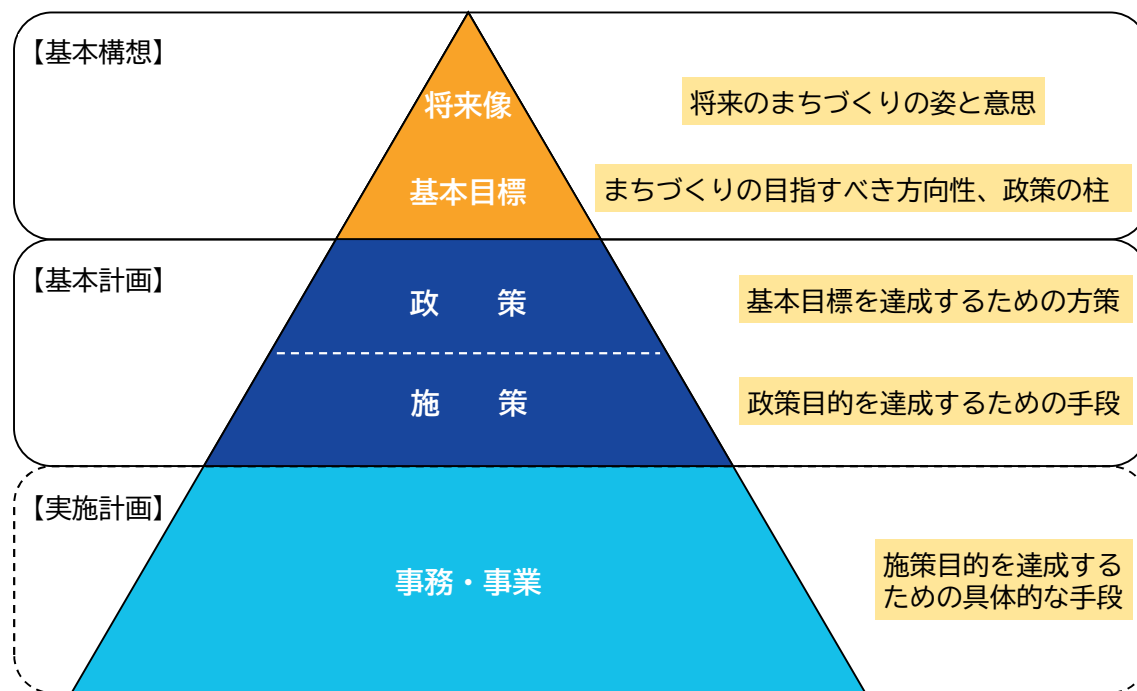
・本市の目指す将来像を描き、その実現のために進むべき方向性であるまちづくりの基本目標を示すものです。基本構想の計画期間は、令和6（2024）から令和15（2033）年度の10年間とします。

②基本計画

・基本構想を実現するために基本的な施策を体系的に示すものです。
 ・基本計画は前期計画と後期計画とし、前期計画の計画期間は令和6（2024）から令和10（2028）年度の5年間とします。後期計画については、社会経済情勢の変化などを踏まえ、必要な見直しを行ったうえで、令和11（2029）から令和15（2033）年度までの5年間とします。

③実施計画

・基本計画に示した施策を計画的かつ効率的に実施するため、各施策分野における主要な事業の内容及び規模の概要を示すものです。計画期間は3カ年とし、毎年ローリング（見直し）を行います。



【総合計画の役割イメージ】

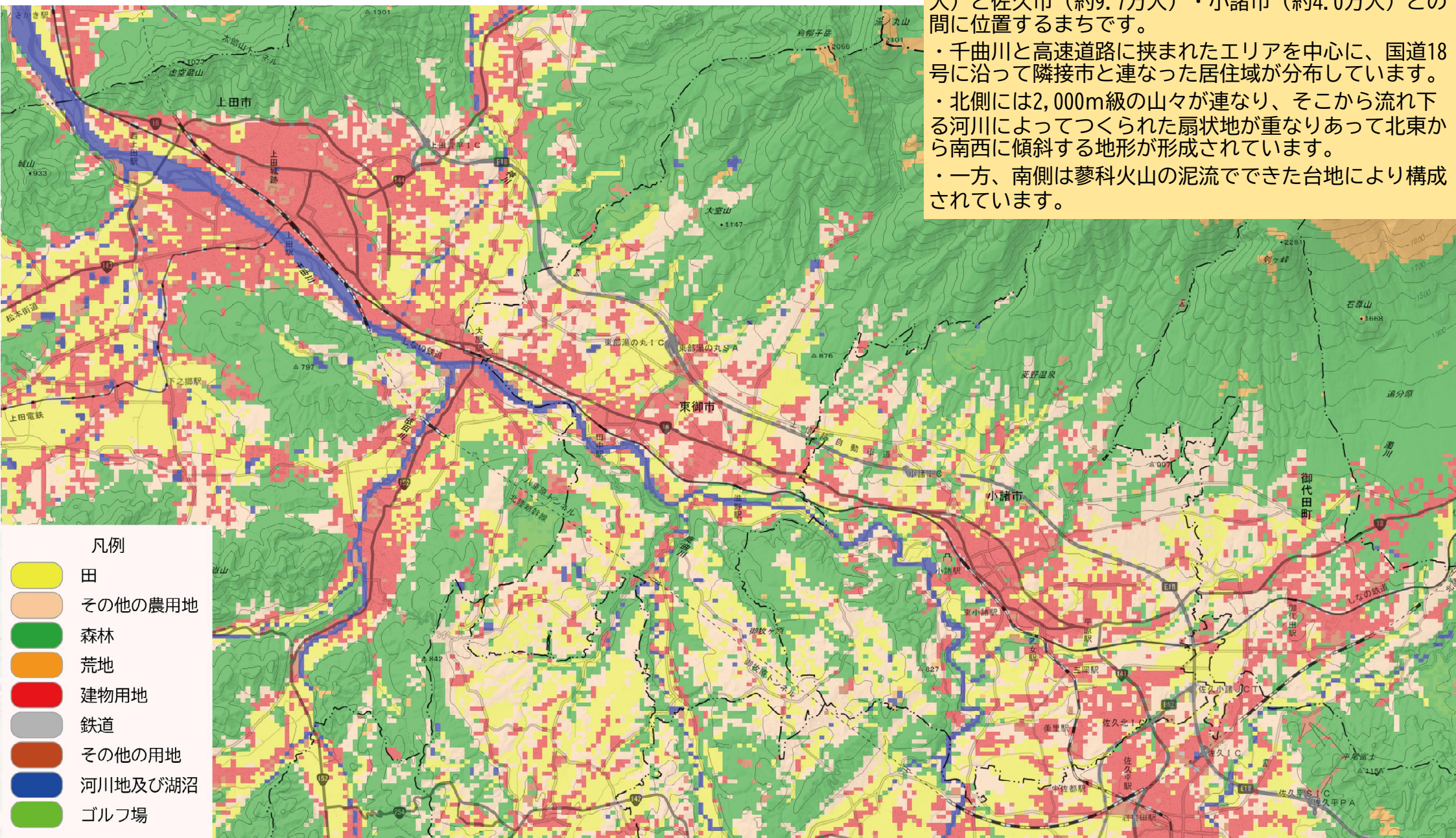
- ・将来像（ゴール）を設定し、そこに到達するための道筋をあらかじめ考えておくことで、皆が協力しながら行動しやすくするためのもの。
- ・そのようにすることで、将来像への到達可能性を高めることもねらう。



2. 東御市の現状と課題

(1) 地勢と土地利用

- ・東御市は、長野県の東部に位置し、上田市（約15.1万人）と佐久市（約9.7万人）・小諸市（約4.0万人）との間に位置するまちです。
- ・千曲川と高速道路に挟まれたエリアを中心に、国道18号に沿って隣接市と連なった居住域が分布しています。
- ・北側には2,000m級の山々が連なり、そこから流れ下る河川によってつくられた扇状地が重なりあって北東から南西に傾斜する地形が形成されています。
- ・一方、南側は蓼科火山の泥流でできた台地により構成されています。

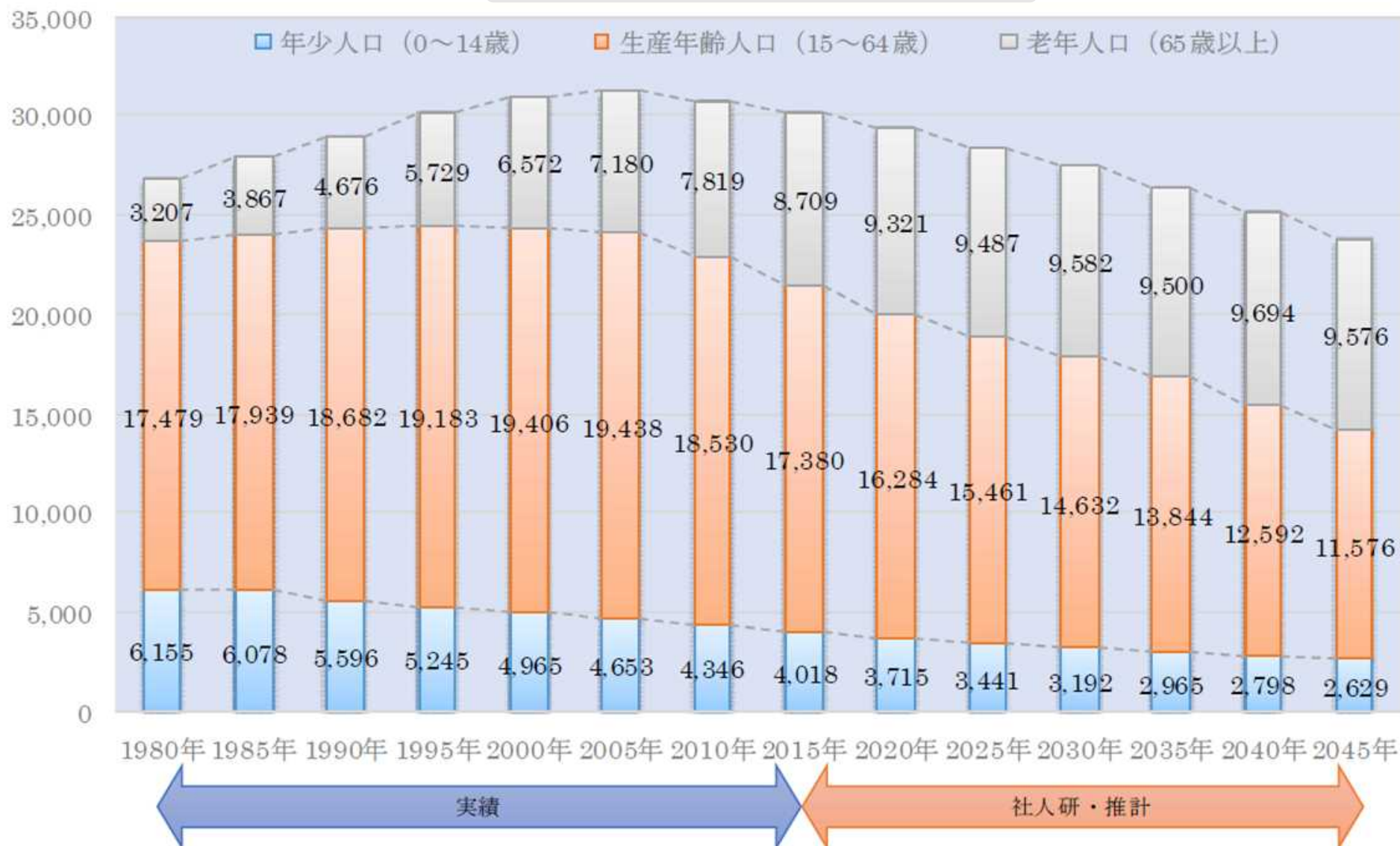


(2) 東御市の人口

①人口の推移と将来推計

・人口は約2.9万人です。2005年をピークに減少局面に入っており、今後もこの傾向が続くことが予想されています。

図表：年齢3区分別人口の推移と将来推計



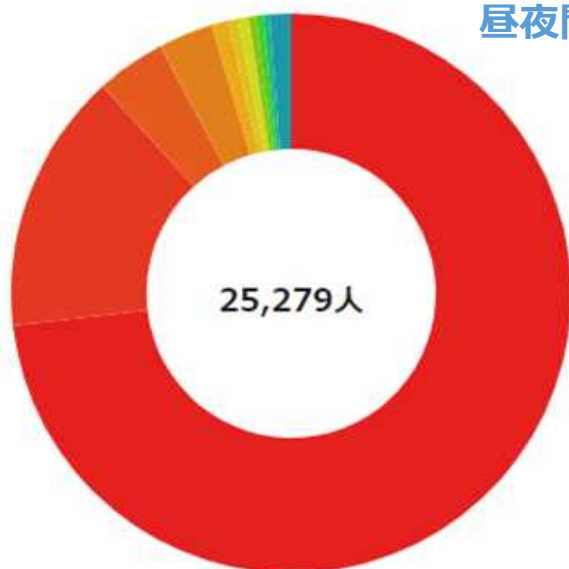
出典：1990年～2015年 総務省「国勢調査」

2020年以降 国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」

②昼夜間人口

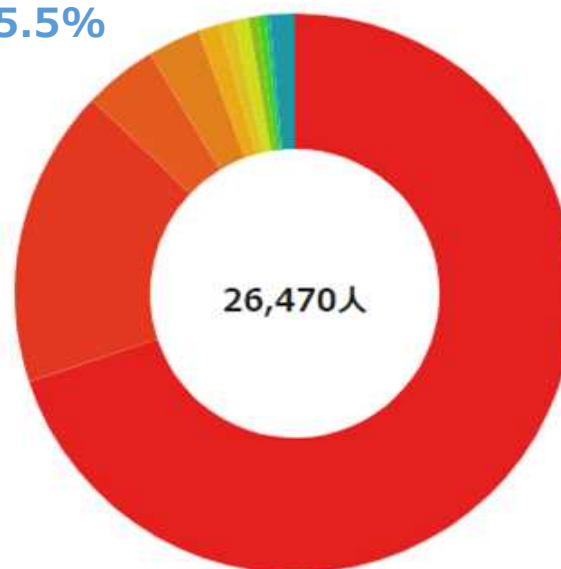
- ・昼夜間人口をみると、約3割の市民が日中は市外に滞在しています。
- ・夜間人口の方が昼間人口より多い、ベッドタウンの性格を有していることがわかります。

昼間人口
(指定地域内に日中滞在する人の居住地)



- 1位 長野県東御市 18,499人 (73.18%)
- 2位 長野県上田市 3,816人 (15.10%)
- 3位 長野県小諸市 1,011人 (4.00%)
- 4位 長野県佐久市 798人 (3.16%)
- 5位 長野県立科町 236人 (0.93%)
- 6位 長野県長野市 154人 (0.61%)
- 7位 長野県御代田町 151人 (0.60%)
- 8位 長野県千曲市 107人 (0.42%)
- 9位 長野県長和町 106人 (0.42%)
- 10位 長野県坂城町 87人 (0.34%)
- その他 314人 (1.24%)

夜間人口
(指定地域内に居住する人の日中の滞在地)



- 1位 長野県東御市 18,499人 (69.89%)
- 2位 長野県上田市 4,572人 (17.27%)
- 3位 長野県小諸市 1,111人 (4.20%)
- 4位 長野県佐久市 810人 (3.06%)
- 5位 長野県長野市 330人 (1.25%)
- 6位 長野県軽井沢町 230人 (0.87%)
- 7位 長野県立科町 217人 (0.82%)
- 8位 長野県御代田町 139人 (0.53%)
- 9位 長野県坂城町 117人 (0.44%)
- 10位 長野県千曲市 67人 (0.25%)
- その他 378人 (1.42%)

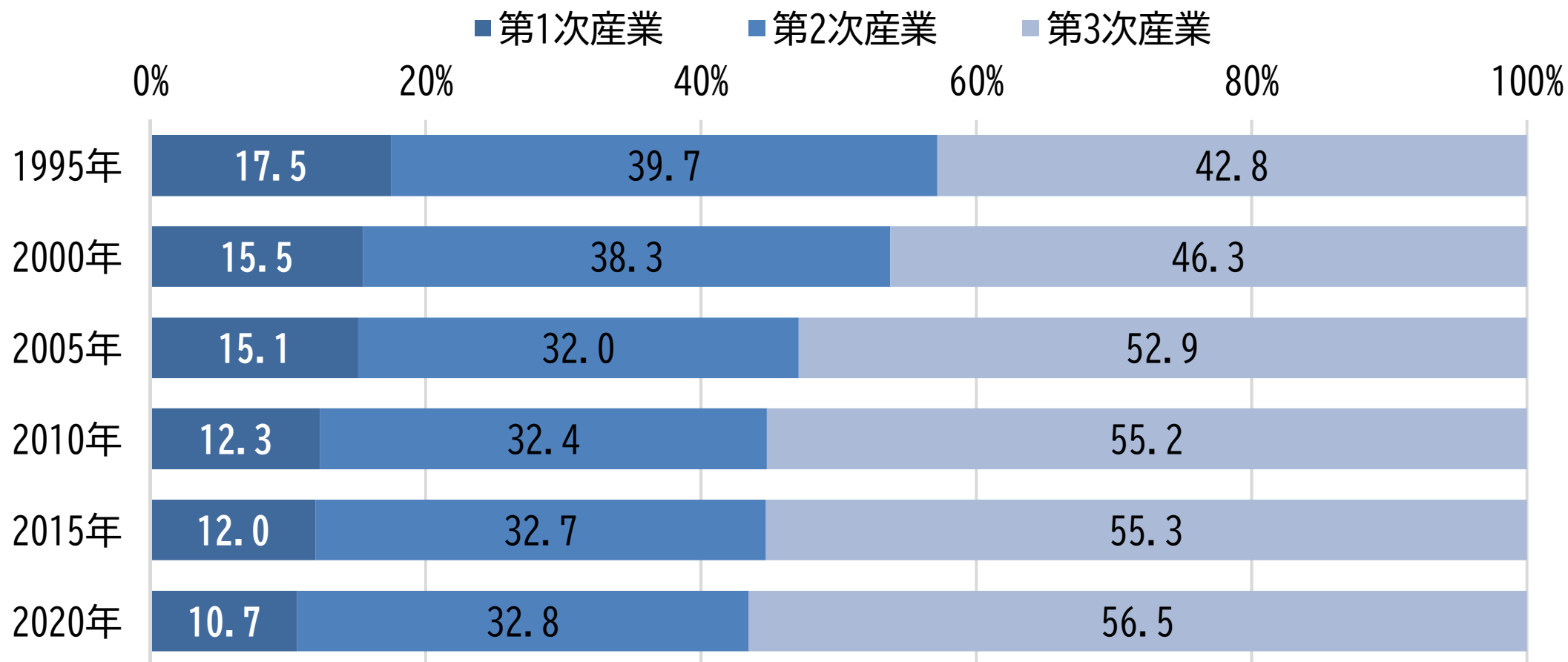
昼夜間人口比率 : 95.5%

(3) 東御市の産業

①市内就業者の構成比

・市内就業先をみると、第1次産業が減少を続け、第3次産業にシフトしていることがわかります。

図表：産業3区分別就業者構成比の推移

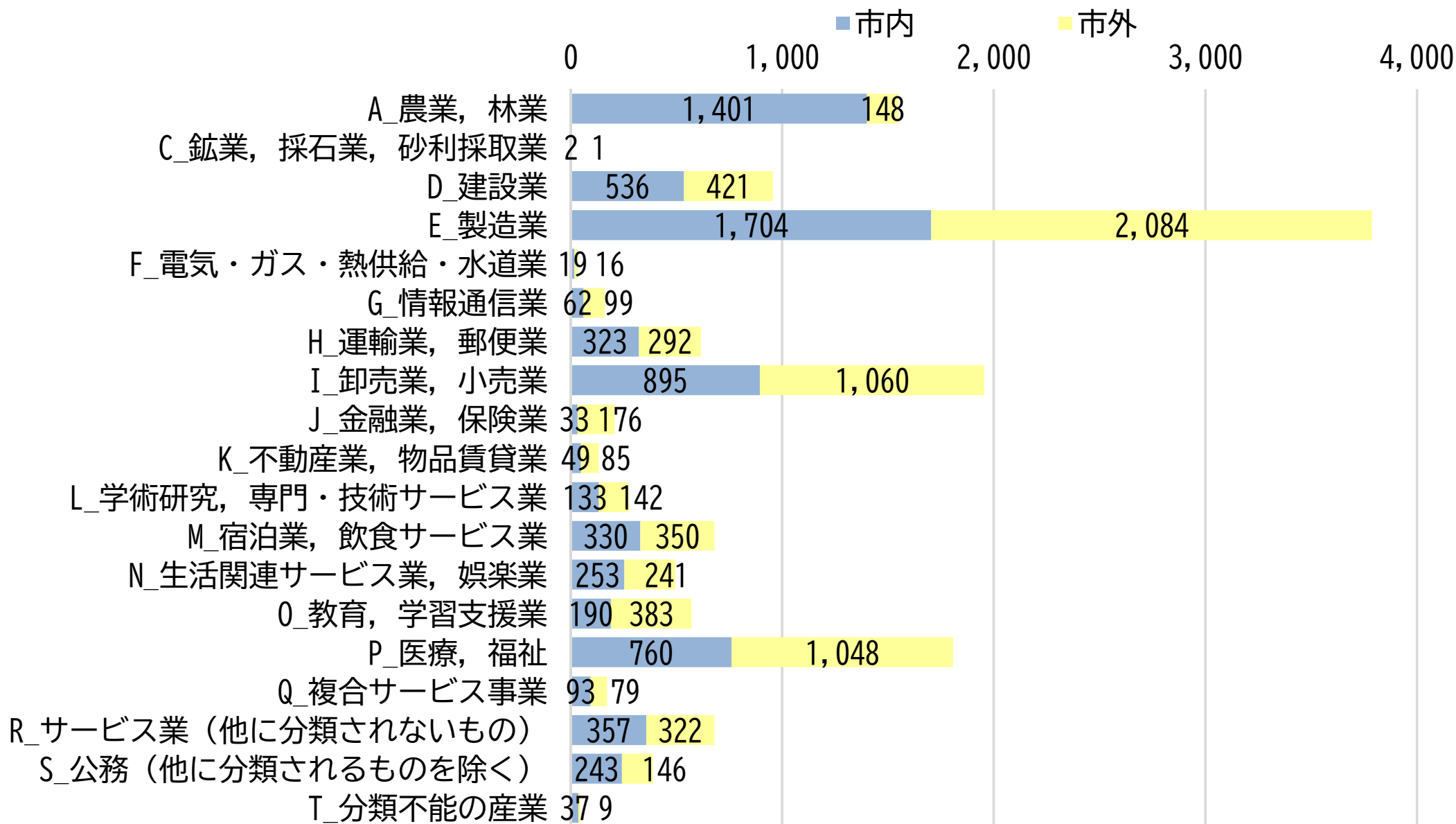


出典：総務省「国勢調査」

②業種別の就業地

- ・産業大分類で就業地をみると、就業者の多い製造業、卸売業・小売業、医療・福祉は半数以上が市外での就業となっています。
- ・国道18号に沿って4つの市が連なる中で、市民の就業地は市外を含めて広く分布しています。

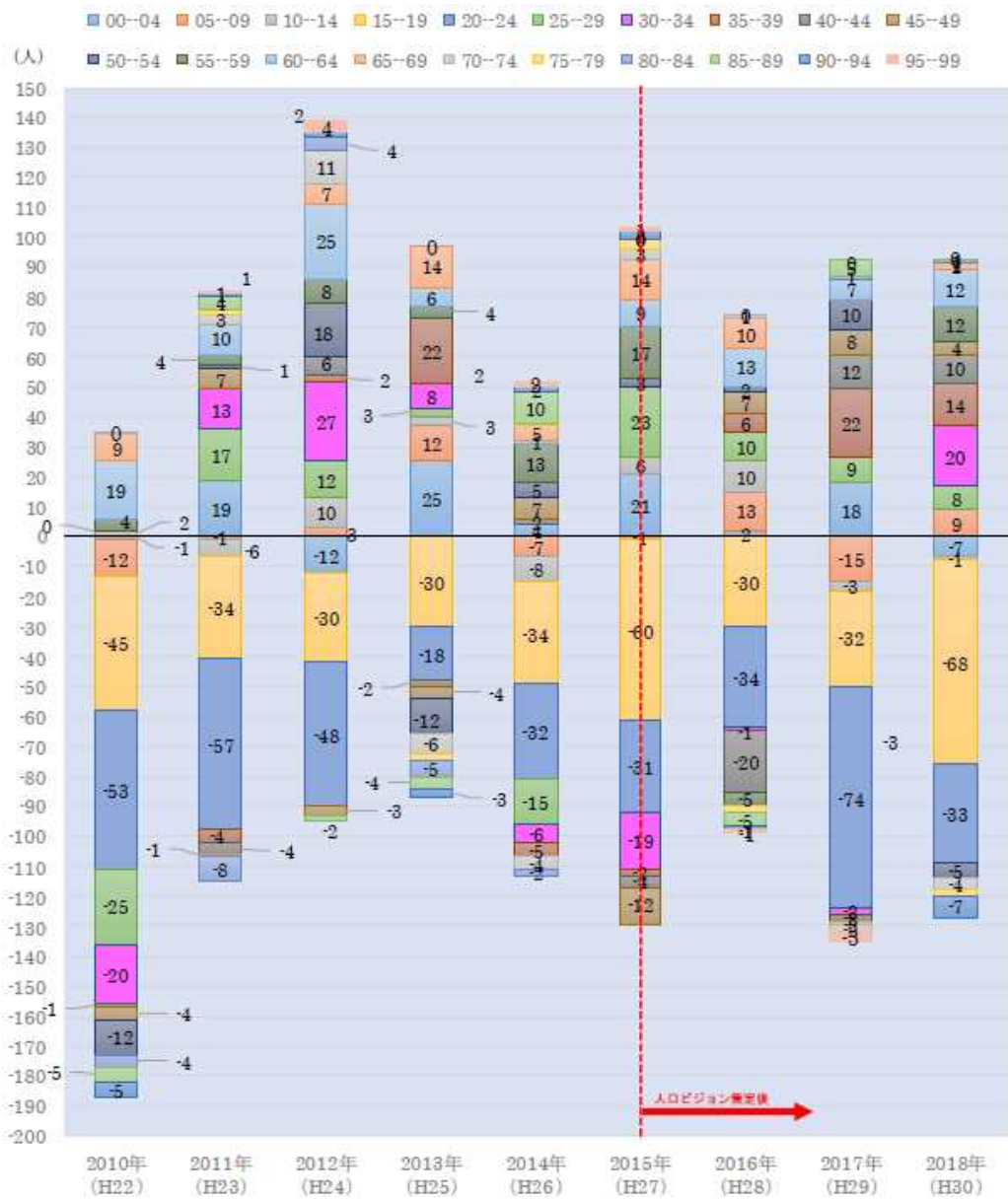
図表：業種別の就業地



(4) 社会移動の状況

・年齢階級別の人口移動をみると、進学に伴う10代後半～20代前半の転出以外は、多くの年齢で転入が転出を超過しており、多くのライフステージにおいて選ばれるまちとなっています。

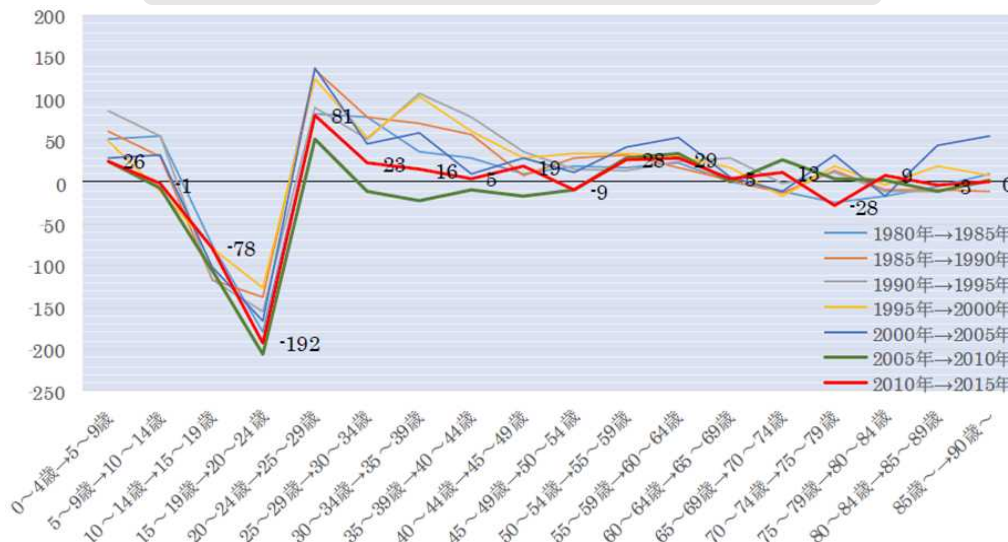
図表: 5歳刻み年齢階級別の人口移動の状況



図表: 年齢階級別人口移動の推移(男性)



図表: 年齢階級別人口移動の推移(女性)

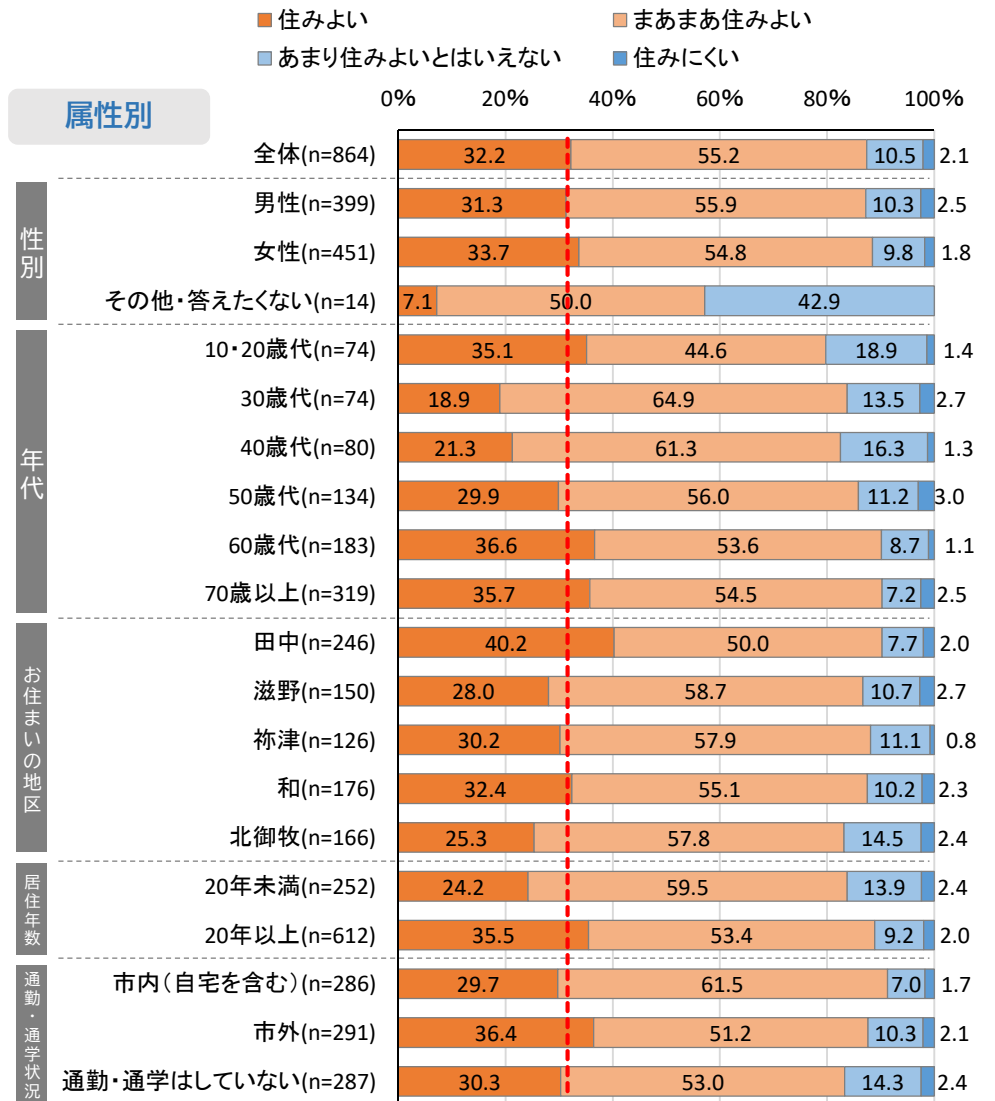
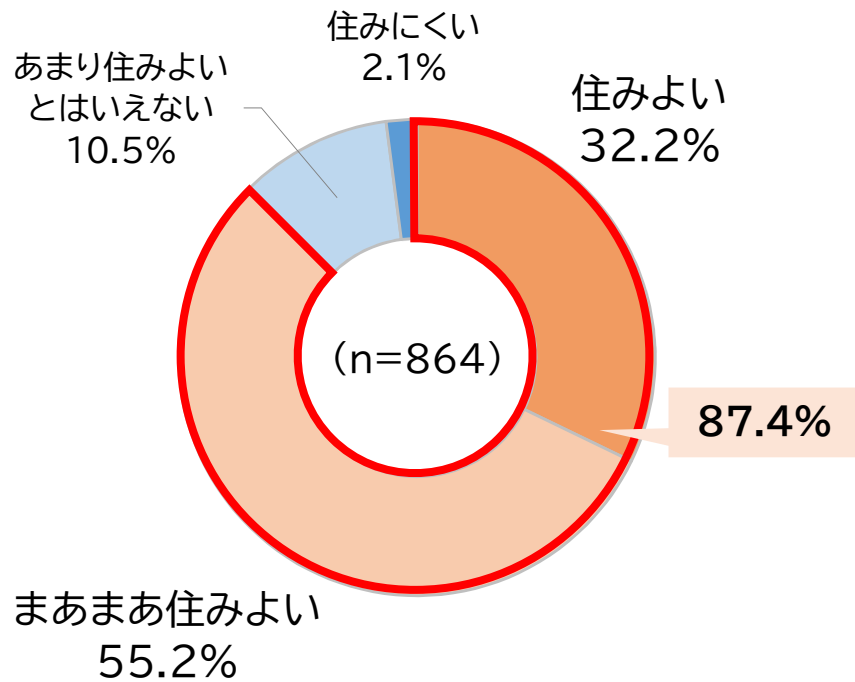


出典: 長野県「毎月人口異動調査年報」

① 住みよさ

・市民からは「住みよさ」について肯定的な評価を受けています。

回答者全体

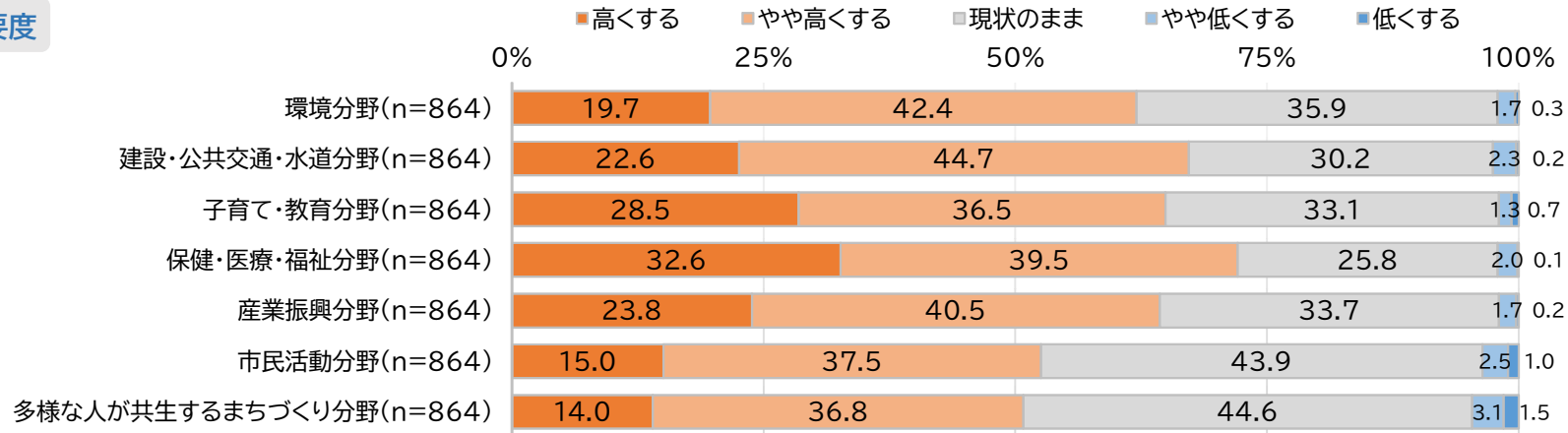


出典：東御市「市民意識調査（令和4年9月実施）」

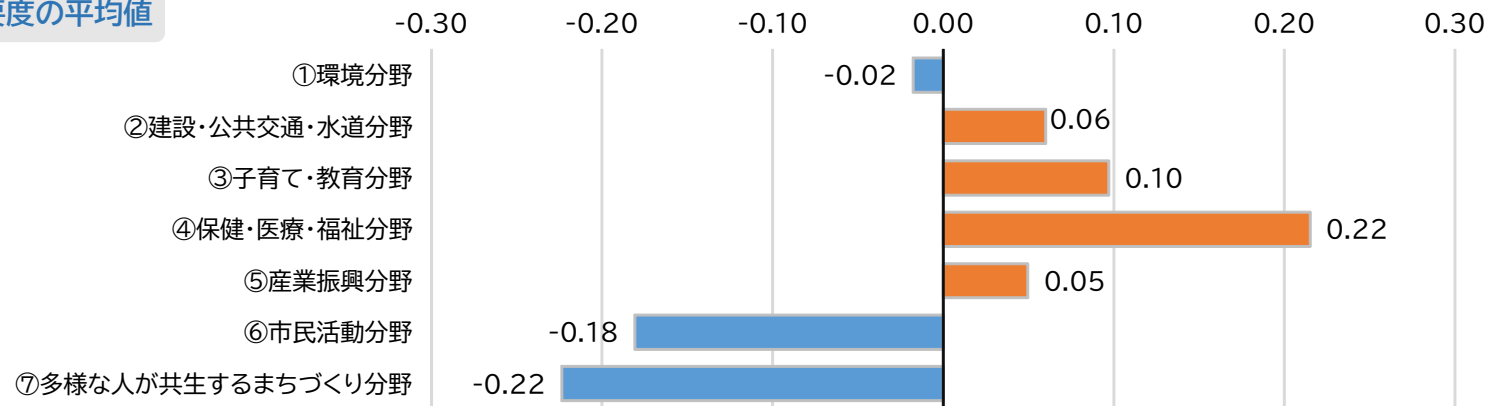
②政策分野の重要度比較

- ・政策の重要度をみると、保健・医療・福祉分野、子育て・教育分野等が相対的に高くなっています。
- ・「暮らしの場」としてまちが充実していったほしいとの市民の思いが読み取れます。

重要度



相対的重要度の平均値

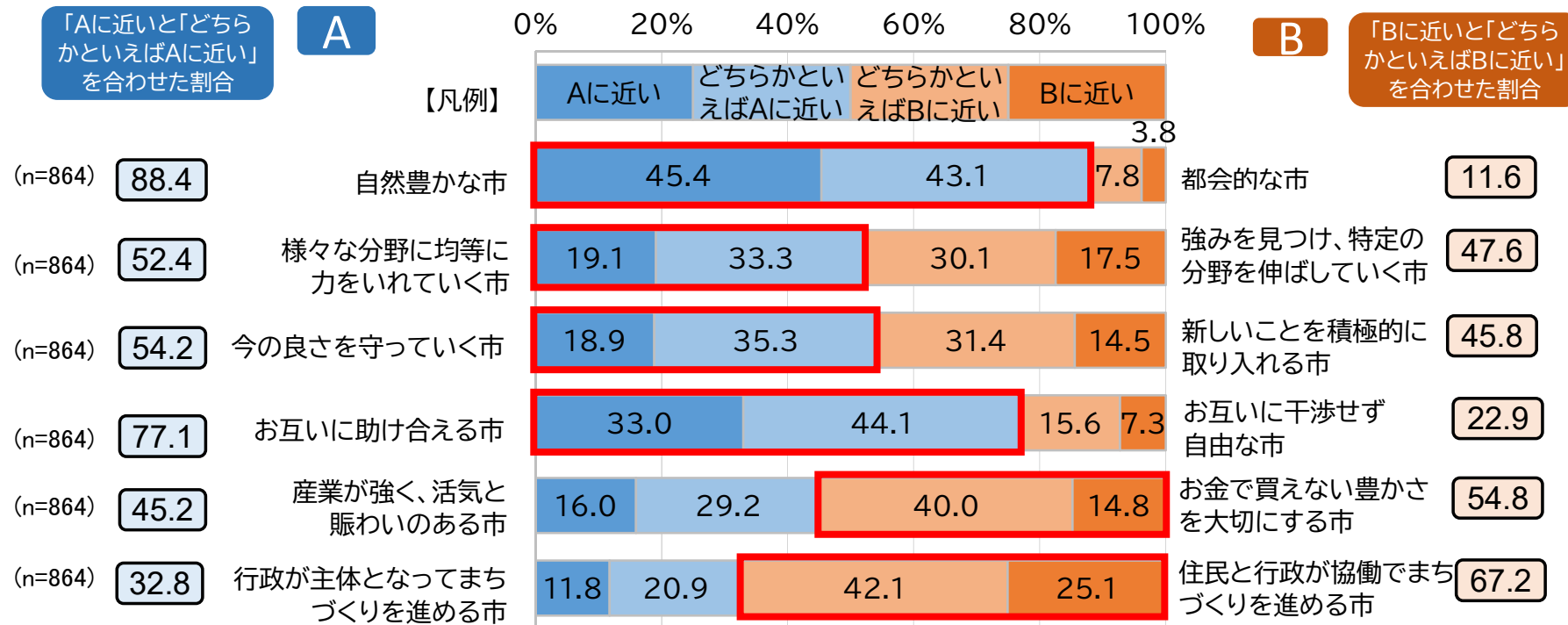


※回答者ごとに、7項目の「重要度」の回答（+2～-2）の平均値をとり、項目別の回答との差を取って「相対的重要度」を算出した。上記の値は、回答者別に算出した相対的重要度の平均値である。

出典：東御市「市民意識調査（令和4年9月実施）」

③理想の東御市のイメージ

- ・理想の東御市のイメージをみると、
 - ・都会的より、「自然豊かな市」
 - ・お互いに干渉せず自由より、「お互いに助け合える市」
 - ・行政が主体となってまちづくりを進めるより、「住民と行政が協働でまちづくりを進める市」となっています。※その他の項目は、回答が二分しています。



基本構想

1. 将来像

(1) 将来像

- ・東御市は、千曲川に沿って4つの市が連なる間に立地しています。
 - ・この中では、人口密度が比較的低く、自然が隣にあるベッドタウンとしての性格を持っています。
 - ・市民からは「住みよさ」について評価されており、「暮らしの場」として充実していくことが期待されています。
 - ・また、就職、結婚・子育て、老後といったライフステージの変化の中で、「暮らしの場」として選ばれている状況もあります。
- ・理想のまちは「自然豊かな市」「お互いに助け合える市」「住民と行政が協働でまちづくりを進める市」とする声が多くなっています。
 - ・人口減少、少子化・高齢化が進む中、限られた地域資源を上手に活用して、より良いまちづくりを進めて行く必要があります。
 - ・近くに、充実した都市機能があることも十分に活かして、東御市ならではの価値を磨いていくことが求められます。
- ・豊かな自然や人と人とのつながりを十分に活かしながら、「暮らしの場」としての独自の魅力を生み・育て、選ばれ続ける（持続可能な）まちを実現するため、以下の将来像を設定します。

将来像のイメージ

まちの特徴・強み等

豊かな自然
さわやかな風

自然と共生
人と自然

あたたかい交流

笑顔があふれる
穏やかな日常
安心できる

実現したい状態

心満たされるまち
心地よいふるさと

暮らしやすさを実感できるまち
持続可能な未来に躍進するまち

夢が実るまち

笑顔が広がるまち
安心して暮らせるまち

※ワークシート参照

参考	将来像
第1次	さわやかな風と出会いの 元気発信都市
第2次	人と自然が織りなす しあわせ交流都市 とうみ

(2) 人口目標

・東御市人口ビジョンを踏まえ、計画期間中は社人研推計よりも人口減少が抑制され、計画の最終年度である2033年は、28,200人以上の人口があることを想定します。基本計画では、この人口規模を目安に将来像を実現する施策を展開します。

2033年の人口の将来展望

28,200人

独自推計による東御市の人口推移と長期的な見通し

